

川柳マガジンクラブ東京句会 10月

平成22年10月10日(日) 駒込学園にて

参加29名 出席22名 投句7名

伊藤三十六、ELVIS、小倉利江

小野六平太、加藤品子、加藤ゆみ子、甲野竜雄

河野桃葉、佐道 正、白子しげる、白勢朔太郎

関 玉枝、星野睦悟朗、丸山芳夫、水野絵扇

村田倫也、高田以呂波、棚瀬くんじ、土江裕美

山田こいし、松橋帆波、植竹団扇

欠席投句

秋山和子、飯島圭子、浦川一平、長谷川康子、

菊地順風、正木三路、渥美恵泉、

自由吟句評会

「近所の目が虐待を食い止める 桃葉

今は、「近所の目で食い止められなくなっている。事件が起きて初めてという事が多い、そこを詠んだ時事吟。

二十六

昔は横の付き合いがあって、近所の目が食い止めていた。そうあって欲しいという句意を取った。こいし

鉄筋コンクリートの建物では音が聞こえない。周りが無関心である。情けない時代になったものだ。竜雄

報告句。我々の生活を振り返ると、個人主義が強くなって

いる時代。昔のような生活に戻れないのだろうか。今後どの

ようにこういった事を受け止めて行くのか、大きな問題

です。倫也

作者 今とてもシビアな世の中だが、うちの近所ではまだ

「近所の目があって、事件を防いでいる」こともあります。

表札が一枚ここにもマスオさん 正

夫婦別姓のことか。面白い。品子

私の「近所は高齢化が進んでいて、表札が一枚の家が多い。

娘さん夫婦が同居されているという事だろう。マスオさん

が上手い。睦悟朗

「ここありたいな」という自分の願望で選びました。玉枝

「ここにも」を「わたしも」「あなたも」などと比較して

みたい。帆波

「ここにも」の「も」を自分もと理解すると面白い。団扇

作者 街を歩いてみると、表札が一枚あるお家が目に付く。

お嬢さんが同居しているのだろう。

浦島の気分で歩くヒルの街 玉枝

浦島の気分というところが面白い。最近の街の変貌を上手

く表現している。以呂波

似たような着想を何句か作ったことがある。都心を歩く

と本当に迷子になってしまっ。共感の句。利江

全くその通り。副都心などを歩くと他所の国に来たような

気になる。六平太

作者 大げさかなと思っただが、都内に出るとビックリする

ことがある。

ファミレスのチビツ子グルメ小煩い 圭子

最近の子供はいい物を食べている。昔レストランに行くこ

とは贅沢だったのに、あれが食べたいこれが食べたい。正

今のファミレスは子供が好みそつなものが多いのになん

して「小煩い」のさうか。睦悟朗

作者 姪の子供達とファミリーストランで食事した時

に感じたことを詠みました。姪たちの年代「三十一才」は

休日は家で食事を作らないで外食で済ませるさうです。フ

ファミレスの味がお袋の味になるのでしょうか？

難病を告白されてからの恋 三十六

難病の句は沢山あるが、告白されてからの恋という表現が

新鮮だった。品子

難病を告白される前から恋をしている。前後で恋の内容が

変化していく。団扇

作者 「愛と死を見つめて」「余命一ヶ月の花嫁」などを

テーマに、問題を提起しようとした句です。

ビビッと出た出会いで妻にする 睦悟朗

感じたこと、妻にするという表現が素直に出ていいと思

いました。裕美

「ビビッと」という部分と「妻にする」という部分のどち

らかが強いとどう変わるさうか。帆波

「妻にする」とわざわざ偉そうに言ったところが面白い。

作者 NHK学園の「印象」という宿題に出した句。「妻

とする」で出したが、「に、でしようか、と、でしようか」

という感想をいただいたので、こちらに出してみました。

フライング気味にタバコに火を点ける こいし

今煙草の値上げが話題になっているが、止めようか止め

いかの心の揺れが出ている。利江

意味が取り辛かったが、タバコに火をつける動作を起こす

ときの仕草。我慢できなくて行動してしまっ、気持ちの揺

れを詠んでいる。しげる

何に対してフライングかが判らなかつたが、ホステスさん

が火を点ける動作か。値上げではないのでは。芳夫

禁煙ゾーンに入るか入らないかの内に火を点けだすので

は。団扇

作者 最近喫煙施設が作られているが、その近くでフラ

インク気味に火を点ける人もいるのでは。

リリーフが見せ場作って水を掛け 順風

ビシャッと締めるべきだったのに、満塁にしたりバタバ

たのでは。睦悟朗

リリーフが成功したという仮定に立った場合、水を掛ける

という表現が疑問。朔太郎

投手の分業制が確立した今の野球を考えると、火消しとい

うイメージと違ってくる。自分で火をつけて消してしまっ

たという意味か。帆波

ピンチでないのにピンチにして抑えたということか。団扇

作者 ハラハラさせてなんとか終わらせてファンを満足

させる。いいピッチャーの条件です

八夕坊は放送禁止かと思う 帆波

赤塚不二夫のキャラクターは、面白いが、グロテスクで引いてしまつよつなところもある。放送禁止とは大げさかと思うが、そういうこともあるかも。知れない芳夫

八夕坊が判らない。何故放送禁止かも判らない。倫也

八夕坊と放送禁止がどつつながるのか判らない。ゆみ子

八夕坊が判らない。朔太郎

赤塚不二夫の八夕坊が何故放送禁止なのか判らない。絵扇

八夕坊が判らなかつた。以呂波

八夕坊が判らない。はた迷惑な坊や？三十六

ウナギイヌ、バカボンなどいわゆる差別に抵触するような点もある。そういう意味では。団扇

作者 時事です。尖閣諸島の問題で大きなデモが行なわれたが、海外のメディアは一面で報じたのに、日本のメディアではどこも報道しなかつた。八夕坊は頭に日の丸が付いている。だから八夕坊も放送できないのかなと思つた。

三冠夏猛暑真夏日熱帯夜 以呂波

今年暑かつた。漢字ばかりでよく作られたと思つ。絵扇

上五は「さんかんか」か。今年の猛暑を見事に思い出させていた。こいし

上五以降が上手いなと思ひました。睦悟朗

三冠夏は造語なので、あまり使わないほうが。猛暑真夏日熱帯夜は分解すると皆同じ意味になつてしまつ。利江

これでもかこれでもかという上五以降が面白い。帆波

作者 暑かつた今年の夏を思い起こして。三冠夏はどうかと思つたが、三冠は誉め言葉なので、逆に皮肉として使つてみた。

迷惑とペットは言えぬヒーリング 一平

ペットのことを言っているのだから、ヒーリングが判らなかつた。朔太郎

飼い主がペットを癒しの対象としているのだから、ペットからすれば迷惑な話。団扇

ペットを癒すサービスがあるのかと思つた。動物は人間よりストレスが溜まらないはずなのに。帆波

作者コメントはありませんでした。

国勢調査へ生きてる返事する 利江

非常に簡潔で、国勢調査という言葉を入れて時事を表現している。品子

私も生きていると返事をしておきました。桃葉

私も返事して来ました。タイミングが良かった。六平太

高齢者の所在確認における、個人情報保護の行き過ぎを感じる。この句の「生きてる返事」は、何となく疑われそうな世の中の空気に反発している雰囲気伝わってきて面白い。倫也

国勢調査は普通記入するもの。そこに返事をするとは生の声で言っているような面白みがある。共感と驚異を含んでいる。ELVIS

よく見る句のような気がした。年金の所在確認に関する着想と似ている。芳夫

まさしく今年の世相という作品。帆波

作者 年金問題、所在未確認問題、そして国勢調査が始まつた。素直な思いを詠みました。

独り身になるのも視野に鱗雲 倫也

空を見上げると、この季節鱗雲が増えてきている。俳句で

「鱗雲今故郷が干切れてる」と詠んだことがある。鱗雲とは干切れるもの。独り身と重なりぐつと来ます。三十六

澄んだ空で、高いところに干切れた雲がある。眺めていると色々なことが心に浮かんでくる。将来のことなども思つ。

上手く表現されている。睦子朗

「視野に」という言葉を入れなくても書けるのではないかと思ひました。芳夫

読んだ瞬間にボエムを上手く表現したと、一番に選びました。朔太郎

作者 俳句として詠んだ作品。俳句は季語に向つて何をぶつけるかである。その句会では「近親者で済ませましたとチチロ虫」「サラリーマンの顔して死せるチチロムシ」という作品もあった。

夜遊びを叱ると娘帰らない 竜雄

昔はこんなに実行力のある子供はいなかつた。叱られて帰らないというの昔と今を感じさせる。以呂波

遅刻ばかりする子供がいたが、遅刻を叱ると、学校には来たんだよと言ひ返す子供がいた。団扇

作者 知り合いの娘さんが、お友達の家に行くまで遊んでいるので叱つたら、今度はそのお友達の家泊まつてくるようになった。結局親がその家に言つて謝ることに。叱らなければよかつたという話。

恋一つ今なら蹴りも捨てもする 品子

若い頃は恋を引きずつたが、ある程度年を重ね、人生経験が豊富になると、上手に処理できるようになる。ゆみ子

若かつた頃は未練たらたらだったのに、今はもうといったところ。倫也

蹴るつて、ちょっと酷いかなと思つた。捨てないで、蹴らないでください。利江

作者の何が恋に対してここまでさせるのだろうか。帆波

作者 若い頃は恥ずかしがり屋で好きという事を表現できなかつた。今思えば損したなと思つ。昔は悩んだけれど、今ならもつとはつきりできる。

昔から親孝行に銭百貫 六平太

百貫だと五両くらいか。意味が判らなかつた。正

大岡裁きで親孝行に百貫を与えたという話を聞いた気がするが。くんじ

親孝行には青ざし百貫という落語。団扇

孝行糖の癖。百貫となると額が大きくなるが。帆波

作者 昔から親孝行が少なかつたからこつという褒美がでた。今も変わらないのでは。

いいよとは口では言つて来たい 三路

口ではいいよと言つて本音は違つ。ニュアンスとしては淋しいので来て欲しい。含蓄のあるいい句。竜雄

年老いた親の感傷。以呂波

口と裏腹の心。京都で「おぶでもどつですか」と言われ

れば帰ってくださいという意味、という話を思い出した。

こいし

実感です。いつか娘に頼るときが来るかもしれないが、できれば頼りたくない。玉枝

作者 今夏の暑さの疲れが一週間ほど入院しました。自分だけの句ですね。

負けるなと弱い自分に言い聞かせ 裕美

よく聞く言葉だが、負けてもいいという選択肢を許すことはマイナスの選択肢も増やしてしまう。そこで自分を鼓舞している。帆波

大阪では、負けても勝った人が喜んでいるからいいではないか」といいますね。倫也

作者 日々弱い自分に喝を入れています。

プライドをハローワークに脱ぎに行く ゆみ子

四、五十台で職を探すことになる、それまでの仕事より良い仕事はない。仕事の内容によってはプライドを捨てないと言っていないだろう。竜雄

良い句だと思いました。絵扇

「脱ぎに行く」という表現。目の付け所がよい。玉枝

共感の句としていただきました。失われた十年、もはや二十年である。そういう今の世の中の動向を盲く捕らえながら、プライドを「捨てる」ではなく「脱ぐ」としたところが良い。「捨てる」では日常の表現になってしまふ。「職安に並ぶ零時のシンデレラ」ELVIS

前職よりも悪い条件の仕事につく場合の感情を「脱ぎに行く」という表現で上手く表現されている。倫也

下五「捨てに行く」「で捨てられる」などと比較してみたい。帆波

作者 プライドがあると、第二、第三の仕事になかなかつけない。

反抗も恋もナイーブ十五歳 絵扇

川柳を見てみると、お年寄りの句か孫の句が多く、この年代のことを扱ったものが少ない。この作品では真正面からその年代を捉えている。正

十五歳の子が刺されたニュースを思い浮かべた。私たちの頃には考えられない反抗と恋。桃葉

その通り。ナイーブという事を詠み込まない方が良かったか。倫也

今の十五歳はナイーブというよりもっと現実的かなと思うが。こいし

一般的に言うとなイブではないだろう。六平太

何故十五歳かが興味深い。十四歳をテーマにしている文芸漫画、アニメは多い。十六、十七はティーンエイジとしてかつては用いられていた。十五歳とは高校受験という現実にかけているのだろうか。帆波

作者 孫が十三歳で、ナイーブなので。十三歳では字余りなので。

つくつくと鳴いたりしない影法師 団扇

つくつく法師ではないから確かに鳴かない。面白いと思う。

絵扇

影法師は自分の事か、連れあいのことか。どこか励まされる感じを受けた。しげる

作者 色々な法師があります。本当の法師でないものもあります。何故それらは法師と呼ぶのだろうか。

父さんにゆう麵作る秋の風 康子

にゆう麵が判らなかつた。品子

暑い時でもお腹を冷やさないようににゆう麵を食べる人もいますね。芳夫

作者 夏の定番冷素麵が、いつの間にかにゆう麵に変わって、秋が来たことを実感いたします。

ケータイにつながる檻で生きつゝる ELVIS

檻という表現が良い。しげる

檻というのが一人暮しを感じる。外界とのつながりがケータイだけである。くんじ

檻から孤独感を感じた。ケータイでしか外部と係われない若者。もしくは、一人暮らしの老人がケータイを持たされている風景。ゆみ子

作者 何通りかの読みが出来る表現にしました。檻という言葉に「驚異」を込めてみた。

梨を挽く新妻の籠軽く持ち 和子

重い籠を持っているたくましい新妻なのだろうか。団扇
新妻の籠を軽く持ったのはご主人では。芳夫

梨狩りのシーンでは。籠はご主人が持った。三十六
作者コメントはありませんでした。

前線の暖簾くぐればそこは秋 芳夫

前線には色々なものがある。気候の変わり目に現れる。そんな中で秋への気候の変化を表現した作品。「前線の暖簾くぐれば」という表現が面白い。朔太郎

今年が高気圧が強く、やっと秋になったという印象が強い。焼酎のCMのように暖簾をくぐる、軽いところが良い。正
面白いと思ったが、菜種梅雨、梅雨など、秋にならないものもある。こいし

作者 彼岸の頃に急に涼しくなったので浮かんだ作品。前線のひらひらが南下して行くと秋になる。

湯呑みが割れて長生きを考える 朔太郎

心象的に良い句だと思う。大切にしていた湯呑みが割れた、それを眺めながら長生きについて考える。利江

なんでもない湯呑みが割れただけに長生きを考える。面白いと思います。芳夫

形あるものには寿命がある。割れた湯呑みから命を感じたところが良い。ゆみ子

モノより長生きしてしまった。六平太

形あるものはいずれ壊れる。夫婦茶碗などよく題材になるが、その時にモノより長生きできたという捉え方と、長く生きすぎてしまったという感嘆。そこは読者に委ねられていると思う。帆波

老夫婦の片方がお亡くなりになった句では。三十六

初め意味が判り難かったが、皆さんのお話を聞いて判りました。品子

葬儀の時に故人の食器を割る儀式があるがそのことだろ

うか。絵扇

作者 長く親んだ湯呑みが割れると寂しい。そんな実際の情景を人生と比較して見ました。

万札を散らす地デジの御催促 くんじ

あまりに地デジの宣伝がテレビにちらつく。万札を散らすという表現が面白い。

共感の句として面白いと思いました。川柳に限らず短詩系文学は第一に共感が基準となる。次いで驚き、立ち止まらせる表現。この作品は共感。カラフルに国家が来ますピツピツを思い出した。ELVIS
作者 わが家はまたアナログ。万札を散らすこの秋、頭が痛いです。

ゼロ金利貯蓄ないのに騒ぎたて 恵泉

連日ドル安などの報道があるが、本当は騒ぐほどドルを持っている人はいないのでは。桃葉

元々ゼロに近いのだからゼロに成っても大したことはない。帆波

作者コメントはありませんでした。

ケータイに弄ばれる好奇心しげる

誰でも判る句。現代を風刺している。弄ばれるという表現が良い。三十六

携帯電話は初め便利な携帯電話だったのが進化してきてメーカーに消費者が玩ばれているのかも。読んで、そんなこと、あんなことと不思議なことがあるなと思う。くんじ弄ぼつとしている輩がいるという事を匂わせている。帆波作者 最初は携帯電話だったのが、進化して沢山の機能がつくようになった。利用者が弄ばれているようだ。

課題吟

「そんなバカな」白子しげる選

「佳作」

顔見知り同士が裁き合う検事 倫也

大抵の馬鹿ならやったことがある 団扇

振り込めが振り込みますと口座聞き 品子

断りもなく中国が線を引く 倫也

ダイヤほど高いトマトを食べ残す ゆみ子

待てど来ぬやっぱり今日でなかったか 康子

俺保証だから間違いないと言う 六平太

胎児から度々届くツイッター 三十六

内臓が自爆するぞと脅してる 三十六

秋霜の検事の顔がワルに視え くんじ

「秀作」

幸せを撫で回したら出る不幸 一平

どちらへも転ぶ札束積み上げる 朔太郎

「特選」

野暮用をつくる貴方の逃げ上手 朔太郎

課題吟

「そんなバカな」加藤ゆみ子選

「佳作」

救急車搬送中に事故に遭い 順風

年金をもらわぬうちに国破綻 正

飛び乗った電車アララ逆へ行く 以呂波

村祭り還暦過ぎた青年部 恵泉

近未来再生医療不老不死 圭子

女房が近頃僕を爺と呼ぶ 絵扇

新聞に僕の名がある訃報欄 芳夫

俺保証だから間違いないと言う 六平太

譲り合う席へ別人滑り込み 以呂波

単身が終って僕の部屋がない 正

「秀作」

千箱の煙草を買って盗まれる 利江

断りもなく中国が線を引く 倫也

機長から神に祈れとアナウンス 順風

三分間吟

「味」白勢朔太郎選

「佳作」

味見する姑の顔に鬼門あり 品子

年の功叱る言葉に隠し味 以呂波

舌を抜く閻魔大王だがグルメ ELVIS

辛すぎる味にもあった新鮮味 倫也

味付けをやっと誉められ五十年 以呂波

これでもか掛ける醤油に里が知れ 品子

人生の味噛み分ける齢になり くんじ

面白い味だ娘の試作品 桃葉

おしゃれ気もトンチも解る味な人 しげる

味の素の味がしないと寂しがり 芳夫

「秀作」

無味乾燥な私を捨てる ゆみ子

味覚なら誰にも負けぬ俺ニート ELVIS

宅配で今年も届く里の味 こいし

「特選」

かつぶしを削り日本の朝となる 芳夫

以上 まとめ 松橋帆波